

抑留記

福井県 山下 均

昭和十六（一九四一）年三月、茨城県茨城郡下中妻村内原、満蒙開拓義勇軍訓練所に入所。同年六月二十七日、敦賀港より渡満、吉林に上陸。

同年七月七日、錦州省黒山県英城村、満鉄小東訓練所に入り、それぞれ将来、開拓農民としての基礎教育に励んだ。夏は主に農業実習、冬期は軍事教育及び学科を約三年間、訓練に明け暮れた。

十九年八月一日、錦州省黒山県孤山子に第四次若越義勇隊開拓員として入植する。

昭和二十年五月、吉林省公主嶺機動三連隊七五二部隊へ現役入隊、連日訓練に励んでいたが、同年八月、ソ連軍戦車隊が侵攻、私は本隊追及班として敦化方面に向かって行軍中、終戦の命を受け部隊へ逆戻りとなる。

吉林の連隊で武装解除をして敦化の飛行場に中隊ごとに集結する。この時点でソ連軍の警備で捕虜扱いとなり、ここで約一カ月ほど幕舎生活で、毎日使役として弾薬や武器の処理をやらされた。

また、水汲みに行く途中、ソ連兵に止められ身体検査をされ時計や貴金属が狙われ、時計は最初に取り上げられてしまったのである。

一カ月ほど過ぎ、日本兵は全員日本帰国と言われ、駅まで歩き汽車に乗せられた。列車は北の方へ進んで行くので皆がおかしいと言うと、ウラジオストック経由で日本に帰ると騙されて連れて行かれた。途中南下する貨物列車とすれ違ふと乗客からは「お前ら日本へは帰れないよ」と叫んでいたが、私は初年兵でもあり上官の命に従うしかない。

シベリア抑留地への旅

逃亡して見つかったら銃殺されると言われていた。

列車はハルピン駅に到着して約二日ほど止まり、今度はソ連の貨物列車に食糧及び衣類等の積込み作業を手伝わされた。

我々敦化の二千人一列車である。ここまで乗って来た満鉄の貨車より大きく、中は二段に仕切っており、一貨車百人乗り込みの二十両編成であり、中はスシ詰めで身動きもできない状態で、ようやく汽車は動き出した。北へ北へと進み、満州里を越えてシベリア鉄道に入っていました。

汽車の旅は続き、途中大きな街で停車をして食糧等の配給を受けて進み、いつ、どこまで行くのやら誰一人知らず発表もなく、ただただ日本へ帰れると思ったのは大間違いでした。汽車の旅は約一カ月も続き、ようやく到着して降りることになった。ここは中央アジア地区のバルナウル市だそうです。

下車後は徒歩で三十分以上歩いて、我々二千人の一団は収容所に入るようになりました。

この収容所の建物は相当大きな鉄骨の平屋建て

未完成でした。中は四カ所くらい仕切りで、出入り口は一カ所です。中は三段に仕切っており、我々が来るまでにわか建造ったようだ。

抑留地の生活と労役

この収容所に入ったのは十月中旬を過ぎたころだと思いますが、朝夕はかなり気温が低くなっていた。

ここでの仕事は、街の工場の雑役や鉄道線路の補強工事だが、建設の手元仕事で各業者の事業主が衛門前に数十人、必要人夫を迎えに来ており、十人から二十人でグループを組んで、市内は徒歩で、遠いところは大小の車で、毎日午前八時から午後五時まで警備兵が二人付き、我が方の作業責任者は大抵下士官級で、ソ連側の責任者は「ダワイ、グイストラ（早く働け）」と申し、冬期に入ってから寒さも厳しいが、仕事はある程度真面目にやっただと思えます。

ロストフカ収容所へ移動三百人

翌昭和二十一年五月には、この収容所の人員を減らし他の収容所の補充として移動させられる。汽車に乗って二日くらいかかって着いたところはロストフカ収容所で、木造半地下である。元はロシア人の囚人が入っていた古い建物である。前年十月、我が日本兵が千人入っていて、十一月から春の三月ごろまでに寒さと労働、食糧不足に加えて発疹チフスが蔓延し、三割近くが死亡している。

仕事は、二キロメートルほど離れた所に農業用大型機械の製作工場で十棟余り建っており、ほとんど我が兵が通勤し、昼夜三交代で働いていた。私たちは死亡した兵隊の欠員補充に来たようです。早速当収容所の一員に加わり、工場通いで働くことになる。

各工場で部品の製造、ソ連の婦人が機械の運転、我々は手元で雑役である。各工場三十人くらいで勤務、工場内の仕事なので寒さは凌げた。私

はこの仕事が入ったので長く働きたいと申し入れた。するとソ連の二十歳前後の婦人と相棒で、ボルトの頭の六角部分を鉄筋で五センチから十センチくらいに切断した頭の部分をコークスで焼きつけ、火挟みで挟んで機械の手元に渡す仕事でした。

この工場は大型農耕機械の生産工場で、十棟ほどの工場に分割して造っていたようです。

食糧の配給基準

一人当たりの配給量はどこも大体同じようだが、米はほとんどなく、雑穀類はトウモロコシ粉、麦粉、コウリヤン、それぞれの雑穀に野菜を煮込んで、やや固めのスープである。それも食器に八分目ほどである。黒パン三百グラムは夕食時に一度に受け取る。タバコはソ連製のバラのマホルカまたは朝鮮製の葉タバコ約十本程度。お金、給料は一度ももらったことはない。

衣類について

夏冬各々一回交換してくれた。

作業ノルマ

仕事が変わったときにやかましく言われ、ノルマが足りないときは食糧を減らし、多いときはグループに増すことはまれにあった。

帰還

昭和二十二年四月中ごろ、ようやく東京ダモイの噂が出た。また他の所へ行かされるのではないかと思っていたが、今度はどうも本当に帰してもらえそうで、汽車に乗る日が来て駅まで歩いて行き、汽車に乗り込んだときの嬉しさは今でも思い出されてなりません。

私たちの収容所近くには日本人収容所が二カ所ほどあり、同じ列車に乗り込みました。満州で同郷出身の方と顔を合わせ初めて話ができました。

この地区の収容所で我々の友達二人が命を亡くし

たと聞き、残念でなりません。

列車はナホトカの方へと進み、途中バイカル湖の周りを列車の窓から眺め、これが海かと思つた。ここを通過のときは四月二十九日で、春の訪れは遅く湖は一面の氷でした。

列車に乗って十五日ほどたつたころ、ナホトカの近く沿海州のある駅で停まり別の単線に入つて、全員、汽車から降ろされた。ソ連いわく、日本から迎えの船が少なく帰国者の集結が多く、当分この地で働いてもらう（帰還中止）とのこと。

ここでダモイはストップして、駅の近くで山から降りてくる松の用材の貨車積込みを一週間して、軽便ディーゼル車で山に移動して暮舎生活が始まり、松の切り倒しから枝片づけ、及び線路の延長をし、切った丸太の貨車積みの日がいつまでか分らず帰国はいつのことやら。切り開いた土地で宿舎や食堂の建築が始まり、松の四メートルから六メートルの木材を両面オノで削り、積み重ねた枠型の建物である。

この山に來た人員は約五十人。今から建築をして越冬するかも分らないとのことである。八月中旬、シベリアの山でも夏の日差しは暑い。半袖シャツで十分。日照時間は長い。シベリアの地では朝は三時ころより薄明るく、日の落ちるのは九時ごろ。でも外はまだ明るい。その反面、冬は朝八時でも薄暗く、午後四時ころに薄暗くなる。

ダモイの夢が消えてこの地に來た私は、大変な事故を起こして一生忘れることのできないことがあります。

八月中旬この山に來て、宿舍及び食堂建築の手元として働いていたある日の午後五時ごろで、仕事も終わり私と枕を並べて寝ている友達と二人で向かい側の山へキノコ取りに出たのである。山の中を歩き回っているうちにいつしか友達と逢いはぐれになり、友を呼べど返事もなく、やむなく幕舎の方へ帰ろうと思つて歩き回つたが幕舎の地形には出られず、なおも二時間、三時間と歩くうちに日は西に落ちて暗くなり、これはどうしても宿

舎には戻れそうもない、班の皆が心配しているだろう、申し訳がない、逃亡罪を犯してしまった。

シベリアで山の奥地に入り込んでしまったら命は諦めなければならぬ、これは自殺かなと思いを走らせたが、こんなところで死んでも誰一人身元を見てはもらえない。帰国が間近に迫っているので何とか人家のある所まで出れば良いと考え、一応夜が明けるまでの十一時ころから午前三時半ころまで、大木の上に登つてオオカミの被害から守る。東の空が明るくなると木から降りて、近くに川が流れているので川伝いに降り始め、二時間ほど過ぎた時点で川は二本の落合いになつたので川伝いに下つて行くつもりだったが、右から下りてくる川はひょっとすると我が幕舎の横に流れている川かもしれないと思つたが、思いを変えて右から流れてくる川に沿つて登り始めた。二時間余り歩いて登つた所の川は、まともに我が幕舎の横を流れる川であることが分かりました。それから間もなく仕事場の所に出てきました。時に午

前八時を過ぎていました。現場で安心して一休み、皆から「よかった」と。こんなに早く帰ってこれれるとは誰も思っていなかったそうだ。以前二、三人の方が山の中で迷ったとき、一人の方は十五日ぶりに汽車に乗って戻って来た例がありました。二、三日で帰って来たのが異例で、シベリアの奥地の原生林で迷ったら誰でも簡単には出られないようです。

懲罰

私は昨夕食も食べておらず、元の宿舎に戻れた喜びや嬉しさでいっぱい懲罰は覚悟しておりました。宿舎に戻り朝食を食べて、ソ連側の歩哨兵が営倉に連れていくからと、警備歩哨の将校宿舎の所まで二キロメートルほど線路伝いに歩いて行ったが、ちょうど将校が本部へ出張して不在。帰るまで待つ。午後三時過ぎに帰って来たので対面して謝ったところ、これからは二度とそんな山に一人で入ってはいけない、私を仕事現場で良く

顔を覚えていたので、私はハラショーラボータのグループ組だからと今回の懲罰は許してくれました。

ダモイ（帰国）

私が事故を起こして十日くらい後にこの山から十人ほど下の本部へ下がらせてくれて、結局健康診断の結果三級とのことで帰国に回してもらい、ナホトカの方へ皆よりちょっと先に来ましたが、ナホトカで私は病院班の指定になっており、約一カ月余りナホトカで待機させられ、また帰る日が延びてきました。

二十二年十月二十日、病院船高砂丸に乗船
二十二年十月二十二日、舞鶴港上陸

帰還後の生活について

帰国の一カ月ほど前より栄養失調状態で体調が思わしくなく、舞鶴国立病院へ入院治療となり、舞鶴病院を一カ月ほどで敦賀病院に転院。ここの

一カ月ほどで体調はかなり良くなり、翌年一月に生家に戻りました。

当時実家には父母と妹が残っていて、戦後の食糧不足時代に約八反歩余りの田畑を守っていてくれたので、帰って来ても食糧の心配はなく助かりました。

私の郷里は今立郡下池田村稗田区で、亡父鶴吉（農林業）の三男として生まれ、兄弟姉妹五人でした。当地は昭和三十年に町村合併により、上池田村と下池田村が合併しました。下池田村は十四集落がありました。過疎化の波で現在は七集落が残っており、私の生まれた集落も全戸廃村になりました。なお、小中学校も廃校となりました。私が帰国した当時は元のままの村でした。私の兄二人も南方戦線に参加しており、私より先に帰国していました。以後、兄弟四人揃い、母と五人家族の生活が始まりましたが、我が地は九〇パーセント以上が山林で、父の代より林業が主で製炭も盛んで、私たち兄弟三人とも製炭に専念して現金

収入を得ました。四人の兄弟姉妹も結婚をし、私は大野市富田地区に移住を決め、昭和二十八年五月に結婚して開拓農業に就きました。

現在、田圃持ち分一町三反歩、外請負管理一町五反を耕作。

我が家族は 私達夫婦、長男夫婦、孫の長女、二女の六人家族です。

【執筆者の紹介】

本 籍 福井県今立郡下池田町稗田で出生

現住所 福井県大野市塚原

生年月日 大正十五年三月五日 七十七歳

出身校 昭和十五年三月 福井県今立郡下池田村尋常高等小学校 卒業

以下の経歴は本文に掲載の通りです。危ない目に遭いながら無事帰還され、運命の不思議さを感じます。

（福井県 林 俊男）